温知叢書

二十六

東遊記 九

和書門
類 二九〇五三 號
一〇三 函
一二 架
六 冊

内閣文庫
和書
類 二九〇五三 號
二七七 函
三 架
六 冊

内閣文庫
番號 和 29053
冊數 6 (5)
函號 177 1164

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

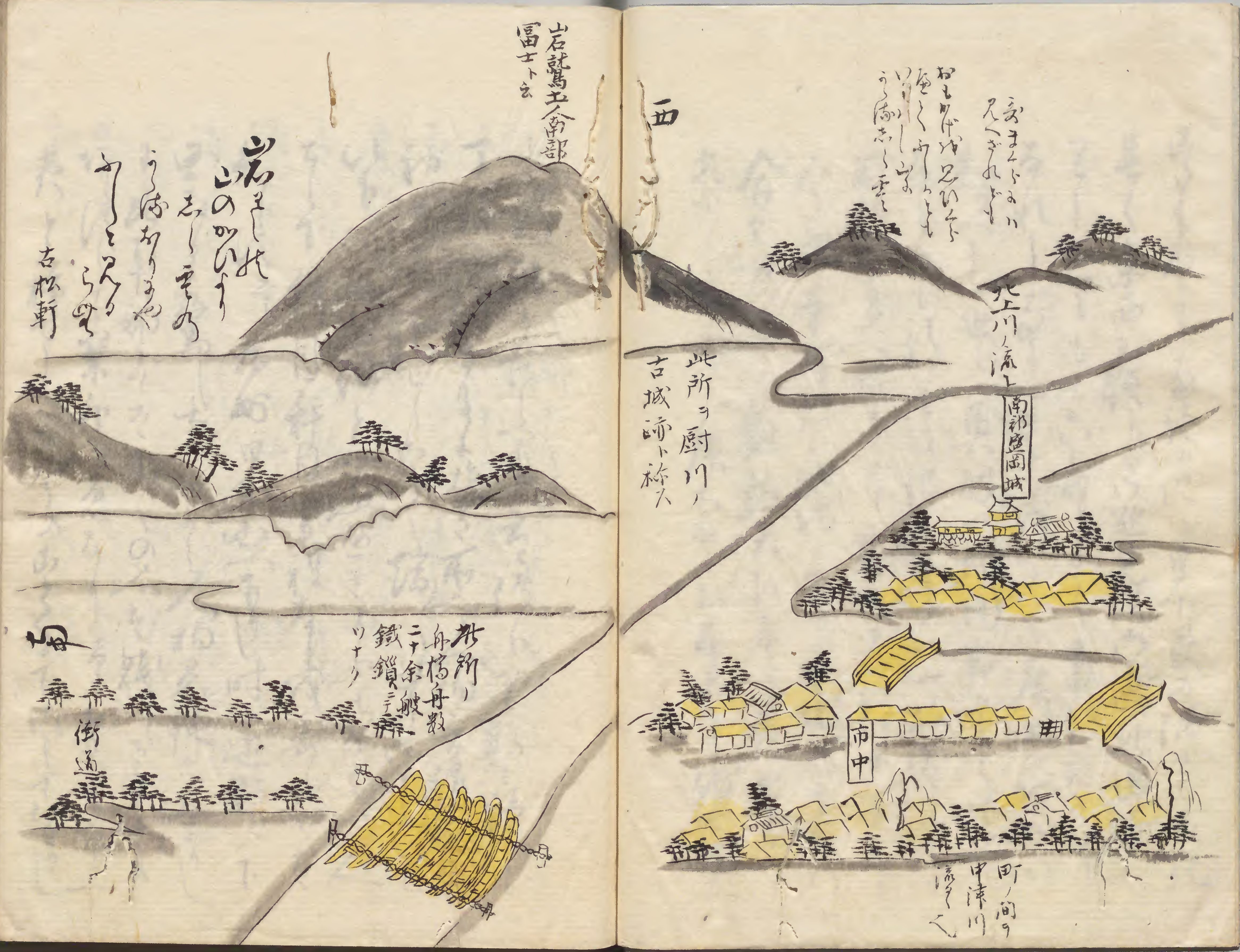
淺草文庫
昌平坂學問所
日本政府圖書
內 一〇三〇九號

東游雜記巻之九

古河辰著

奥羽の二ヶ国ハ海内地第一として廣き地
也と云さしもの有徳し大南部侯十万石小
南部侯二万石都合十二万石の高にて知行なる
かの所十郡あり是を地ならして南部と称す
原野多し然りといへとも計るに七八歩
なる事は凡中国筋の十ヶ国ほとの高有し
尤山多原地のミ廣く都て人民少く

はく致し南部の地は日本最の隅にて南北
長く東西は狭し只巡見使の通行の曲道一分
又はもすくに有りかく南部の地をも
なれし其家に是を試みくしも広大の地なれ
知るべし世は奥羽の地図類あまた道中記
なとかも行程記しまたは一枚摺となして
所持せる人有り是を見たりと云事なく
今度幸に御供にまかり此地へ来れ
合せ見しは観踏大に有り参考する
甚少しの事に広大なる故なさへし他に出でし



国立公文書館
National Archives of Japan

しら髭を生ふより云と伝ふ里数を称して
丁数の路さまさま替り遍く人物の縁の事は
神めぐみも社はいらく端し記り中よりして
皆の人を得しいふ風きよりもなく一人
とりて精同称同異説ありて飛く(?)ろ
知るべし九州回向西一方(?)りし時迄鄙の下
西方を発足し事柄のほか人物并記ハ有かりし
ま始事部まて下々の人を残しきの詞は
悟り流して業部に見あり其都市(?)に頼上
夫と称せしも今のあるくまて流して有かりし

事もなかりし古へよりも中より以上の人は
是非なく今も古くよりかの居し貞任宗任
の為道欲知る事もなく思ふハ古居との風俗
古く樵おの備帯き見当らく覚れし事之
盛岡を南部大膳大夫の城下まて呼しよりハ
此所まて町の長サ廿余町表家前と覚しき
商家も数軒ありし人の以無類の志のゆくしい市中
千七百余軒と云し事なれども是を先年
よりは巡見使へ申上る定りの事にして實を
三千余軒城下往年よりハ多しくなりたり

士人の物語ども咄ハ当書より大城と云し上方
筋の城とハ違ひて至て国様に白壁なども見へずして
極てよき事もなし是迄城下ハ三町ほどなく
市中へ中津川流て町の南より北上川へ
落て一流となる北上川の落合ハ無橋なり
舟数二十艘にて舟の出入ある渡場にて岸橋
合せ舟の上へ又ハ厚板にて橋二丁ほどなるべく
幾も是とし渡るにてかなるうき所にても
流されざる也 大釜又頭し橋まて池は来る

橋あり
岩鷲山ハ盛岡より西南の間にそひへて絶
常ニ雲雨を帯山峯残雪時々ハ駿州富士山に
似たり世ニ奥州富士と称せるも此山なりまた
土人ハ南部ふしと云上ハ津軽の岩城山より
ふしと見れハ此山よりも低し南山とも云富士
ならし似たりとて富士の名をたてへしと駿州
の富士より是ハ十分にて其二分にも不
及ましく此方の高山と称すれと狭くして
甚タ駿州の富士山ニ属しぬ比類ニ遠し

かゝぬの片見眼わかぬほとニ盛岡より
東南ニ南昌山と称せる山南部第一の高山
ありまた姫か嶽と云山も高山ニて岩
鷲山に相対せり一厨川の古城跡と云ふ所
岩鷲山ノ麓ニあり流ハ大山村都の前に
北上川ニ入りて平地廣く土人田代ニ勤むる
気根弱く稼きし事無く有りとかく
盛岡市中報恩寺とよへる禅宗五百羅漢
開かく観音堂ハ自然自作の像ありて堂中に

三許なるハ古き傳として彼此家々に伝へ
いまもハ系譜なき所へ世々の宝物と安
信貞経の太刀と云所盟人云ふの太刀あり
大銘なく身も清らかにて銘ハ未詳
形がして焼刃なく藤の丸紋付して
あり安信豊志の定紋なりや未詳在れ
太刀なし只藤子又へしるす之

類聚 俊頼

千載

磐手の関 人のこゝろ思ふ思ひしきふいはての山

おもひとも岩手の山に年をへて
朽や果なん谷の埋木

琅浦

名所の磐梯山同国異実録定か所しへ
東都の御ゐ詞も不知 よみ人挑太刀名所郡司領
ます玉逆鉾思ひも云 直へし磐梯山同国伝
夫木集 も 磐手も郡の比久十八

こちのく此磐梯の麓れハいてのみちのく 前家に
名所の此下旧跡の縁ぶ岩手の山の坐はいらん 前
見ぬ人ハいつし逆らなし 岩手の里の山吹の花 千載 紀伊
森岡城下の此宗の年をいひ返す 初し
人称もおくれしかも 此花として町中豪家

右大せひ寄り集りし所に其事をなるは
名を四隣のうちに定て知る事もなりけんと
其場に於て懇勤なって尋しに委しく次
其ゆへしけ迎へては将相定めをいへ一里としし上
道の行程にいふは七丁成に一里とせる所も
有りて様々に是なるを聞くの云ともなし
移りかはる定りなし西国一里すれに
七里を云ふ上道の一里まで七丁一里成るは
古里と云ふ上総の一里と知り六丁一里の所は
六里と云ふ併大道の一里と出す事を記

廿し事有りける馬原らしきすり御定みち
あるの極用お師様えし上留るして其御
家は一統もなくて皆し元長小屋のもとし
意思ひしょ家業の事申して左と拙なる
発し様しの曲内也申つしと御の高相
起く其御役せる事ともありし為之頭分
の事様求先てより多くあれ共り家根此
かまりせんきせしに頭は役の頭と其世に
事類頭と並ひて頭の事は知らぬいうんとなかし

一中坂との人ハ左を行の道し

九月十日ニ盛岡城下止宿

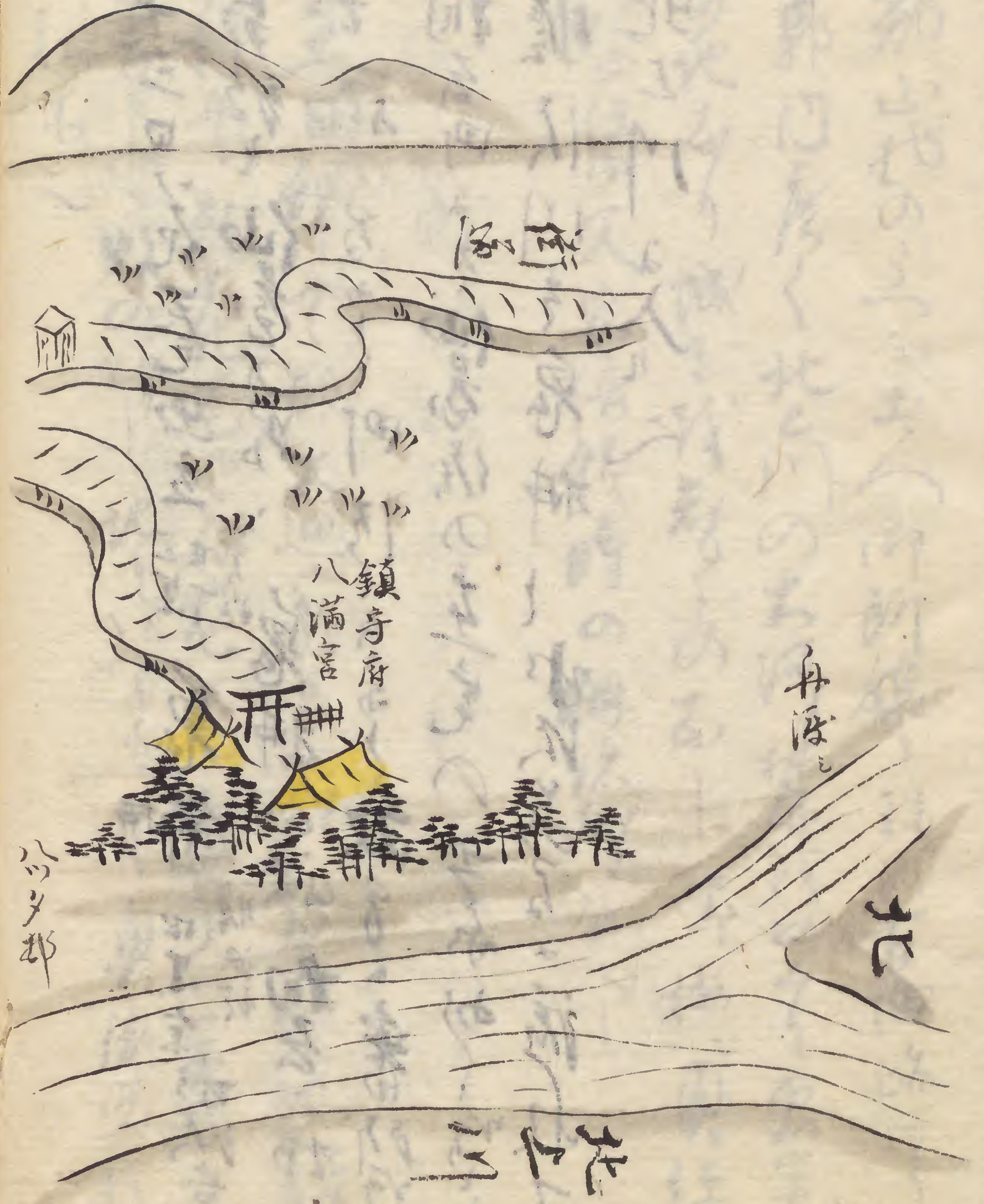
十一日盛岡御發駕 此ゟ下ゟ三里余 郡山宿ハ大迎ニ止宿
御茶屋 御右ニ左ニ無之様ニ此迎ニ坂[illegible]し
ニ風土をよく見ル事也之盛岡より至
南ニ獨(ニトウ)桶松と称せる松ありて圖のごとし

松の圖

郡山村の辺に古人御所館と称し古城跡あり
郭内広く北上川の大河麓を流れて要害
の地なり城主誰なるを知らず亦梅貞任
宗任の父安倍頼時の柵跡なるべし

十二日稗貫郡大迫を発足 二里卅余 和賀郡土沢 三里十五丁
稗貫郡花巻ハ岩花巻とも云花巻城也
書し牧の頃し北上にて今奥州道也
記之

十三日花巻出立 二里廿丁 鬼柳 四里余 水沢岩
南部と仙台の界ハ 和賀郡 鬼柳の辺 胆沢郡 相去り郡北
云所の如く町続きなり双方に番所あり
相去町より仙台領の土地の古みなりと云
胆沢川を鬼柳と水沢の間に流れて
北上川に入る之



圖ノ所

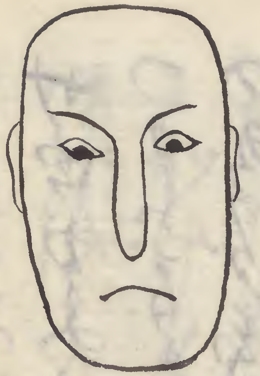
鎮守府の㘴地ハ街道より五丁余去りし北
石河り素林繁茂し 北ハ瞻沢川流れ
東ニ北上川めくりて要害堅固の地ニして
鎮守府を置る所なり 八幡宮の宝物ニ
頼義義家兵甲網の太刀一振矢の根数本あり
古人ニ兼而云傳ふる事訛なれど此道ニ云れ
るやと申何なく尋ね見ぬ又此寺門のもんぐ
中し

十四日ハ浅草参詣〔二里〕岩屋戸所〔江刺郡〕廿五丁伊手〔江刺郡〕
村宿仙台領に入りしより世に通用
する銭ハ御法度となし石巻に鋳る通〔ゼニシダイ〕
宝の角銭のごとく見しも悪しく
ありて国民たりは差ひとも此銭又
正銭は行はなくしても用ゆる事あたはず
払捕銭ハ全一分に〔角銭〕四貫九百文余
に掛けるなり是より仙台に入るよりこまり
價銭かく常に所有の割合あるまじき
まてせいせんかく調へし事難がりは

廿四文もせしるなり是ての悪銭なる百せん
つりかへしには悪せんもまぜんも混ぜて捨りし角
の五ろ銭なる賊事忽ちに砕かると云の事
小賊部忽ちに賊部に入て一日もかゝつき出れ
仙台領ともかれてハ一せんも通用なし
是よりて仙台領の者も此の為
此旅なる銭は一せんも通し悪し
方へ遣りはの用ふる仙台表の割合なし
て納める也

此所ノ方角付上ニアリ

小沢の驛西はつれより南へ至る北上川代清水川の
西南代膽沢郡せし東北ハ江刺郡
より 岩手郡 下川原郡 北川より岩尾戸まで廿四丁
岩屋戸まで本堂の内にも仙人堂の上
ながめし毘沙門天堂の巡見所まで宝物数多
の中より図のごときの異石珍らしきものあり



人面石ト称ス長三寸七分横二寸八分石色
青白ニテ眼中ニ黒色ノ玉アリ口中白リ
歯ノ所高リ鼻ノカツコウヨリ至テノ
似像石ナリ

至て珍らしき石なりし 遊物なれバ希有の所謂る
爾しのらし

十五日停の部にて出発し 弐里 大股村止宿
新道の山越にてかぎりもなき深山に入
あり紅葉の此辺すこぶる見事にて凡目を驚かす山々は
楓木のたくひ多く染めいろよくいたし 紅葉の様
錦しくよみし 歌を於ては多くよみたし
すまゝ如くハ思ひし 事あまた今の紅

美ふの布しきせとんてきく和く路も紅葉ふかく
及ハぬこゝろと思ハれ侍りし事ありけるに時には
古人の跡ゆかしく思ひ出せしはしる事へ
故人の名を尺せる紅葉山路をけ行 古渓軒 神の気を残
遊き坂ありて七曲り峠と云て百り坂ゟ右の方の曲り所
四十八曲り峠ゟ江刺郡と気仙郡の界あり是
より八方ひらけん所にあまて見るあまき山林あり
此朝ゟ宗つよく東都の方を中すりも近く数
中よりも一番明りて山の峯く高々く晴

あしぬ風に宗など思ふ事へ
十二日大股村にて泊る 五里半 横田村へ行宗止
君此をちしく 漸く岩等にてはしめて老樹
たるまりあつくいかしけて日中あしてハ日郎あし
岩巖石数多きおいかゝり下ゝ気川 流して 瀧に
蔓橋とてある 往来ハ難儀あり 此川を渡る
より此処へ流れ 棧の通ふ橋あり見える
出て行かし流ゟ つきよふに思ふほどな
倉ふかき橋と此岩くのあい人の家村一流れ

出し海のうち

十七日今泉ヲ發足 此間海辺ノ道 十六里余 気仙沼止宿

今泉ヨリ気仙沼間ニ 鐺木峠トテ大坂アリ

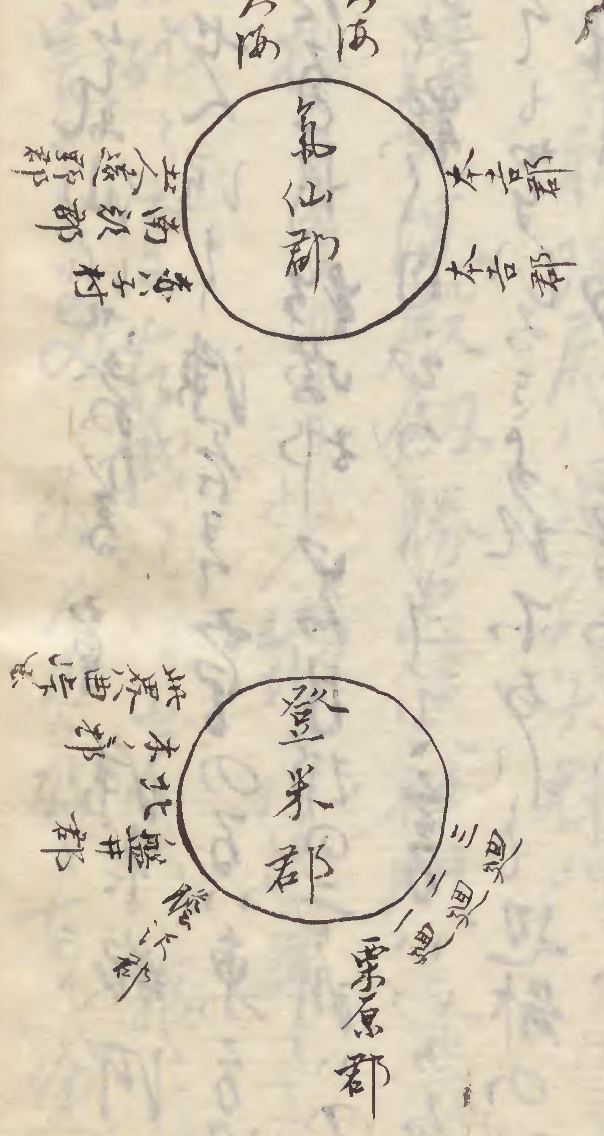
今泉と云所より大築の町中を海辺ありなり一ツ子
魚多し川にハ鮭鱒鮎杯取れ川を貫ス
本流立る一ツも海へ落さるゝよふにして海ありて取れと
云ツむ岩村湖よりありて後の川へ今泉より
南ハ小雲の境と云なり十ケ頭ちに（北ハ気仙郡長部村 南ハ本吉郡小泉村 界）
右ハ是より平地ニ下り東ハ海を浮しとせし大海
あくし西を連ね出る崩り仙屋領ニ入りて此辺より
増ありしツよわかし気仙沼と云所も入海ありて
三百余軒の町ありて大築の所之風景よりて洞
の辨天より称して面白き洞穴図のやうし

洞弁天知圖之

北
鹿折村
塩濱
洞穴弁天
気仙沼

洞の辨天ハ耕せる所の穴なり一丈ばかり横ニ入なる
穴の口より汐ゑ入向ニ弁天を祀し其の傍ニ佛を
彫刻し或ハ雲龍ぐらち或ハ天女と覚しき形も
みゆれども崩れて定かならず小舟にて
彼穴ニ入れバ曲りて横穴あり奥暗く汐の満
干の時刻ニより或ハ穴の奥へ入ハ明らかなり穴ハ
海底まても続くと思われ汐のさし引あ(?)し
て可り土人の物語なり此辺の浦人ハあり穴
とこそ此所なるの俗ニ袮の洞穴とて
勝ニ覚へてなり

鹿折村ニハ境を別し気仙沼ニ商人多く
大海なハ三里の入海にて出帆の入船の船数
入津して諸り鰹魚の名物ニて多く取れ是を価
持しありける鰹節ハ宮城の売買せるなり



十八日気仙沼迄は九里 津谷根河原（ツヤスカハラ）
気仙沼より津谷まて五里の間ハ東方海にそひ
海辺通り 本吉郡 牡鹿郡の二ヶ所ハ海に
漁入多く田少しとて乞食ハいと多く
取らても少なハいるきよ孔不ありけりとて迎跡の地けハ
見まわしき津まて 濱母のかハきよくよ商ひ
ありしさて此海岸は異郷にして津へ異をあり
て乗方にあれ 松島牡鹿郡よりハ大ひに劣
まり
津谷村ハ少しき町にて 此所に安養山 浄福寺

と云 禅院は住居を建立 墓所 本像を安置
像は甲冑を帯し床机に腰かけし御廟へ
しかしよれ化したるにて古く哀也 みな事しく
をおもひ出し而墓ハ 古きまん
吉祥院殿八遍次信大禅門　文治元乙巳二月十九日
清光院殿剱勝忠信大禅門　文治二丙午九月廿五日
右 梅とみ見事ゆゑり此人此地まて下り建しとみへし
山口郡と云ふ 古城 此所より出入りハ館と称す
要害よくさしたる要害の城

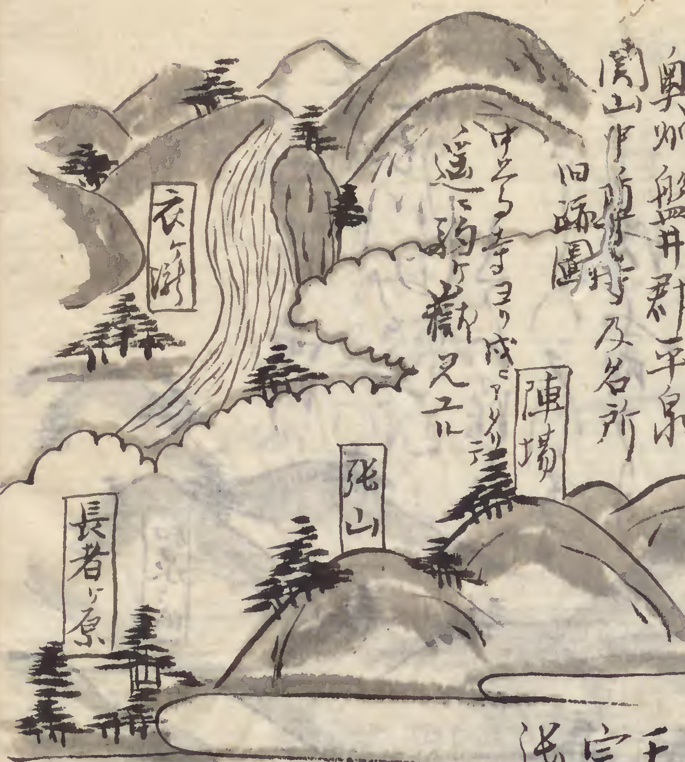
せし所やと尋しに羽黒(?)薩摩守といひし
古戦場と云傳ても委しからず此所も
古戦場之内の様子 楠 義経 中國征伐の頃
跡もはじんやと古人をとなむしのびに氣の毒し
しるしに跡けし事之

十九日 狼河原御発足 四里 花沢 一里半余 千厩 せこムマヤ
狼河原と云所ハ家業野の名廃して東
郡なく人の名にしめよき網業出る所之
也 狼の難にかゝり狼河原と地名せり
よ云伝て今ハ羽黒山 狼をおそれ移りて此方の人

狼と云ハ五人を辭せし此辺ハ府なく田綱
有しまゆへに狼の子と存候とせられ上方
中國筋のはなしには狼をおそれは狼中狼
に出会ふ時には狼の涙なく府をば逃ぬ
てはきれといふんきんに狼狽して通るなりと
古人物語せしも哀なし

廿日 千厩御発足 三里 薄衣 一里 中尊寺坊
中尊寺千厩松川かしき五所之世辺にても
高館のきんかし衣のたちにて立入とこそ
きくへる事せし高館かく和精もあり

事なかりしも余のなかりひと不及かし奥六郡を
南北卅日ヶ道と成さハ二百三里余ありける
所なれハ道中央よりも南よ陸奥しるされとも
辺郡なるの太の也とく中尊寺を国の中
央なりと以く中尊寺ると称名せしと安置の
太のかよ上てしろ中之関山中尊寺と号ハ巨山の規
名かとしく本堂院あるし一領ごより地石寺石って
の金地なと家附志経之ちかしよりもかしきく
堂塔の所りしなと藤原清衡臨府将軍し
ありて基衡秀衡ハ父子三代の間ヨ堂塔合



奥州盤井郡平泉
関山中尊寺及名所
旧跡圖
中尊寺ヨリ戌亥ニ当リテ
遠ニ駒ヶ嶽見エル

御建立せしこと世に知る所なりしものし
世人の云伝ふる所之今其当時よりのものてありしは
書つくしかたき多かりし也

天喜康平ノ頃源頼義朝臣安倍貞任
宗任追伐ノ時陣場トナシ給フ所ヲ今陣場
泥山ハ二ヶ所ノ地名ト云

金売吉次ノ居宅ノ跡ヲ長者ヶ原ト云
今礎石残ル安倍頼時ガ滅ス夕リシ成道ガ
琵琶ノ柵ハ洋官照ガ小松館ト洋

衣ヶ滝ハ中尊寺ヨリ西ニアリテ見エズ滝ノ
傍ニ慈覚大師衣ヲヌキ給フ所ト云
有リ是ヨリ衣川ト称ス

西

衣川みきはによせて（？）
さしても川瀬
清く流れり
西行

いかし旅は
日和もかさまさく
衣の袖や
しほる雨
古松軒

関山中尊寺ハ
仁明天皇御宇
嘉祥三庚午年
慈覚大師ノ
開基也寺院
諸堂数多アリ
紙面セマクカ為ニ
略シ侍ルモノナリ

むかしこし昇鶴れを
きるれは家のれとも
えやえとそめぬ
重之

西行

きゝもせすたはしね山の
さくら花よしのゝほかに
かゝるへしとは

よみ人志らす

袂よりおつる涙ハ
みちのくの
ころも川とも
いふへかりける

西

高館ヨリ中尊寺ヘハ五町
土人ハ高館ヲ判官館ト称ス
高サ凡一丈バカリ東方ハ北上川
ヲノゾミテ二丈余嶮岨ナリ
南北一丁余東西三十間
バカリ柳御所加羅楽
御所ト称ル所平地ニシテ
松林ナリ方二柳ハ高館柳
御所加羅楽御所右ノ
三ツ所古ハ一郭中ノ
名ナルヘシ南北五丁東
西二丁バカリ

中尊寺ハ此国衡よりて光堂経堂の二堂
を残し御堂の一をば思ふ故其光堂は金
色堂と称しく天仁元年の建立 清衡の建立 堂中
にハ金箔を押して金色とせし 堂形は方の
名をひかり堂と云はれ 今はかこみて有
金色なり 今有し堂の内部をみれば一寸
何も布をきせ其上を黒漆をもって黒く塗たり
く其上へ金箔を押したり 内に三種と
部は金の花模様と檀おどしとて上檀に阿
弥陀如来を初め観音の像をおさめ左右は中檀

又ハ廣目二天部ニ十余躰の佛坊り仕様ハ内清
衡の棺坊り大治元丙午七月廿七日卒左檀の
内基衡ハ棺あり保元二丁丑三月廿五日卒右檀の
内ハ秀衡の棺有文治三丁未十月廿八日卒
秀衡此棺の側ニ和泉三郎忠衡の首桶あり
清衡の太刀二尺八寸基衡太刀一尺八寸守宗秀
衡乃太刀一尺八寸守宗拵ニおし金具尾ある瑞し
あつきあふのしおくく清坊りて知れぬ秀衡の
嫡男泰衡又此命ニえむくよし（ ）討
の時忠衡ハ此泰衡ト同く謀故ニ

泰衡思ひし忠衡を殺害スル时忠衡二十三歳
此ハ首ハ世に知る事ハ今回前ニ忠衡の首
桶を見るに于忠存ニ蔵し此首尺疵跡せし
ありし忠衡僅ニ二十三歳ニなりしかるにかくましきるや
歳乃若かりし顔にいたしく士あハれ思ふべし
右ハ人の云伝へに当村寺中山金色寺の従僧
名僧ありて以て清衡三代の墳ニハ数多の
黄金を納し置く今一山此寺院衰廃
し却ちて盛り墳中の黄金を掘出しても
今も尽く存置せハ清衡三代の仏事も

かの山へしとく大坊ば集めて堵みし権現
をしめ給ふ城宮を見しより都く東叡せし
ぬめあをしとして七堂が並し殿僧おびたゞしき
おそれて今やせんかくやせんと迷ひめぐる
うちに本の瑠璃光佛の像をあおぎ漬へさせて
白骨となりたる其ね給の僧は飛乱して死を
拾ひえのはらくして金色堂に納め今の世迄
と云こ时代も詳ならず出人の云伝へのこれ
るよしまた様々の宝物はかぎりもなき
事にて佛菩薩の説をくはしく言ひ残し此
佛像多く一山中一の堂宮を称せらるゝは

天台大師の絵像を紙本に画し給ふ一千紙本
と云 物 世に珍らしき古物と見えしるし
書には小野道風などの初世との能筆多く画
は良能兆 金泥筆の経物雅かに清衡
三代の奉納の宝物 蛇の歯 火の玉なんど
称ていろいろの物 御迎送にて一流其由来之
数多あるなる様に宝は略し給
康永二年の頃 御出ありたる絵はり形も一風
なりく珍らしくめづらし 其二

黒岩の家と云ふ大天狗 一本 辯業の係りは化
示れも弁業の係り長六尺ばかり 又名の
作と留りし世みる弁業の画像は遠ひと
は蔵不勝の係之志ふれも顕して其世と
見て新色せし所の新しくむかし 此ま
ちぶいは猶よろしくめでたし十卵弁業護持
佛とく古佛とは別之桜川と称せるは北
上川など云ふ 其時東稲山（タハシ子）に咲き桜
樹般東なく衰せし 頃名付しるものとなりし土人の物
語なり

中堂寺のあるは東鑑などに誌し侍り 事
跡多く事なかくあらしかくし 寛まいは而り
見咲せしのこれを記して大ひに略せるもの之

衣の里にとる家まで衣の名之　兼好法師

来てきて暮れぬとてあはれなる衣の里の名にたれかくて称

和泉式部

衣の関　詞花

もろともに立ましものを陸奥の衣の関をよそに聞くかな

土御門内大臣

ちりかゝる紅葉のにしききてそゆく衣の関を越る旅人　中納言定家

はるゝ色は雲の嵐越てけり衣手の雲の峯の明ほの

衣川　新古今　源重之

衣川みなれし人のわかれには袂まてこそ浪は立けり　清原元輔

新拾遺

流ふく風涼しくて衣川の夏深には袖さぬ色けり　法性寺入道前関白家三河

新勅撰

人知れぬ者のこゝろけハ衣川袖のしからみせきもとめなき　従三位為子

旅人を渡さる舟は時ふる衣の関の秋は嵐よ　中務卿親子

夫木

和泉式部か衣きし里の梅は花さへ紅の色に咲ける　よみ人知らす

きのふまてちりまかへなん衣川まて流る百鮭の月しん

即此所の地理残えてつらし古へ源頼義父子安倍頼時を征伐の時貞任宗任ハ竜城して籠み戦ひし衣の館衣川柵と称せしは今の中尊寺此山なるよし後は大山連く

とし胆沢に北上川の大河あれは西北より衣川
めくりて東北に北上川に入一流れにある要
害堅固の地なりしかは爰に籠城して貞任兄弟
并に義家卿を追ひ払ひ衣の多てハほ
ころひにけりと云の下の句をよみかけ給ひし
かハ貞任駒の口をひかへ年をへし糸の乱
のくるしさにとしてかくよみかけしも此所にやあるらん
軍書なとに記し侍る地名を訛りなく尋
しに年経りぬれは辺鄙なる故に土人地名
をも取しなひ詳ならさるもあり兎角に書物に
もみえ難て信には定りかたし

藤原清衡ハ荒川太郎武貞の猶子なり
武衡家衡謀叛せし時義家卿に属し軍功
ありけりて陸奥守府将軍に任し奥羽の二州
を領し次に子基衡基衡か子秀衡
と称して三代凡九十年あひに繁栄し今の
平泉村に於て伝せりと云る処の御舘奥州
御所といひし所なり此事ハ世に知る所に昭然
たり就中清衡此所に舘を移しハ衣川ハ棚なく
墳墓の地として寺院建立せしものなるへし

中尊寺縁記には仁明天皇の御宇慈覚
大師の開基とかゝれとも詳ならす定てむかし
寺堂塔なとのありし事なるへし要害の
地なるを以安倍貞任の柵とし衣川衣の関
の名によりて衣の舘とも称し安倍貞任亡
滅の後は清衡今の柵の御所と加羅御所の
御所此地に舘を移してより中尊寺古跡
所なる故にや大ひに堂塔を建立し今地を
ゑらひし墳墓の地とせしより此寺繁昌せ
しものと思はれ侍るなり是をもつて縁記

あやしく称せる記には佛家の説(セツ)を加へて虚説
まゝ多し信しかたし
走湯の権現と称せる神社あり清衡の
霊を東鑑所記と云鳥居より入へき余り
此事は出入に尋しに知したり梅ヶ森山
権現のある事なるへし
高舘　此人は判官舘とも云つあり　東鑑にては衣が舘と云　大嶽岡のことし
秀衡義経を此舘に請しまいらせ秀衡
の子泰衡頼朝にすゝめられ義経を討の節

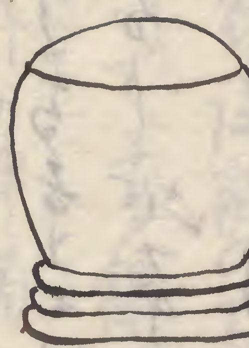
命等をして郷とふせき今の義經堂の下おかゝく
妻子を害し義經自殺志のふ平時
三十一歳ホ人と傳ふよしつね従者おほひ高
館にましまし時も山に牌り北上川に猶きふ
あそてる百民ましもあきなしとて義經乃
行々に秘に泰衡是者みをねむの折にのと
鎌倉より義經を討でしと下知り泰衡等は
そして父命に死むきらく義經を和郷より
自従いし人を一人も殘す殺しけり郷におゐく
ものとくを殺害に國民是をかなしみ泰衡

ハ不孝ふ業をおくみて出乱せんとし頼朝是
をきゝ幸ひとし經ゆく名と泰衡を征伐志ハ
終ふ殺自ある滅して泰衡ニいぬけ後教迎の
百性義經の物ちて小堂を建立し木像を
安置して今にあかく祭りて旅ハやさしく崇
用のもんもありかきてしるしたこと
今ある義經堂方一間半義經甲冑を帯
床机に腰をかけ居すふ木像なり長三尺斗
或云く書ニ高館ハ衣鍛冶民部大輔基成ト

云々しその四館あり基成と云しは奥州の公
孔目 滝本あり大夫錦信頼の舎弟なり
信頼謀叛の事によりて奥州へ配流せしが
故ありて高館に居しなりとなり
萩井の陣場 白馬城 雲白館
常平陣場
名所記にはいはれなしとも地定かならず

廿日中尊寺 坊中に止宿し 廿一日多賀里直に
街道筋は一ノ関江三里 江三里ハ宗 達谷村へ二里余
達谷村より一の関江二里半
平泉寺へ 中尊寺より 十七丁 毛越寺建立より
ま中尊寺に同し今はなくなりぬるおもかけのみ
かくなし此寺の跡東鑑を見る事し
境中に 三間四面の大日堂あり此辺旧跡あり
宝物品々 ありあり中に在る図せるあとさきの 陳塔
ありあるの云へは経堂と云つとも云形解し

むかし佛器にして名代茶入なし



頭にして高サ二尺七寸九分廿七尺
まハり下の方ほそく成ハ底なし
鉢のことく僅ニ頭の見ゆる所
ありぬへし

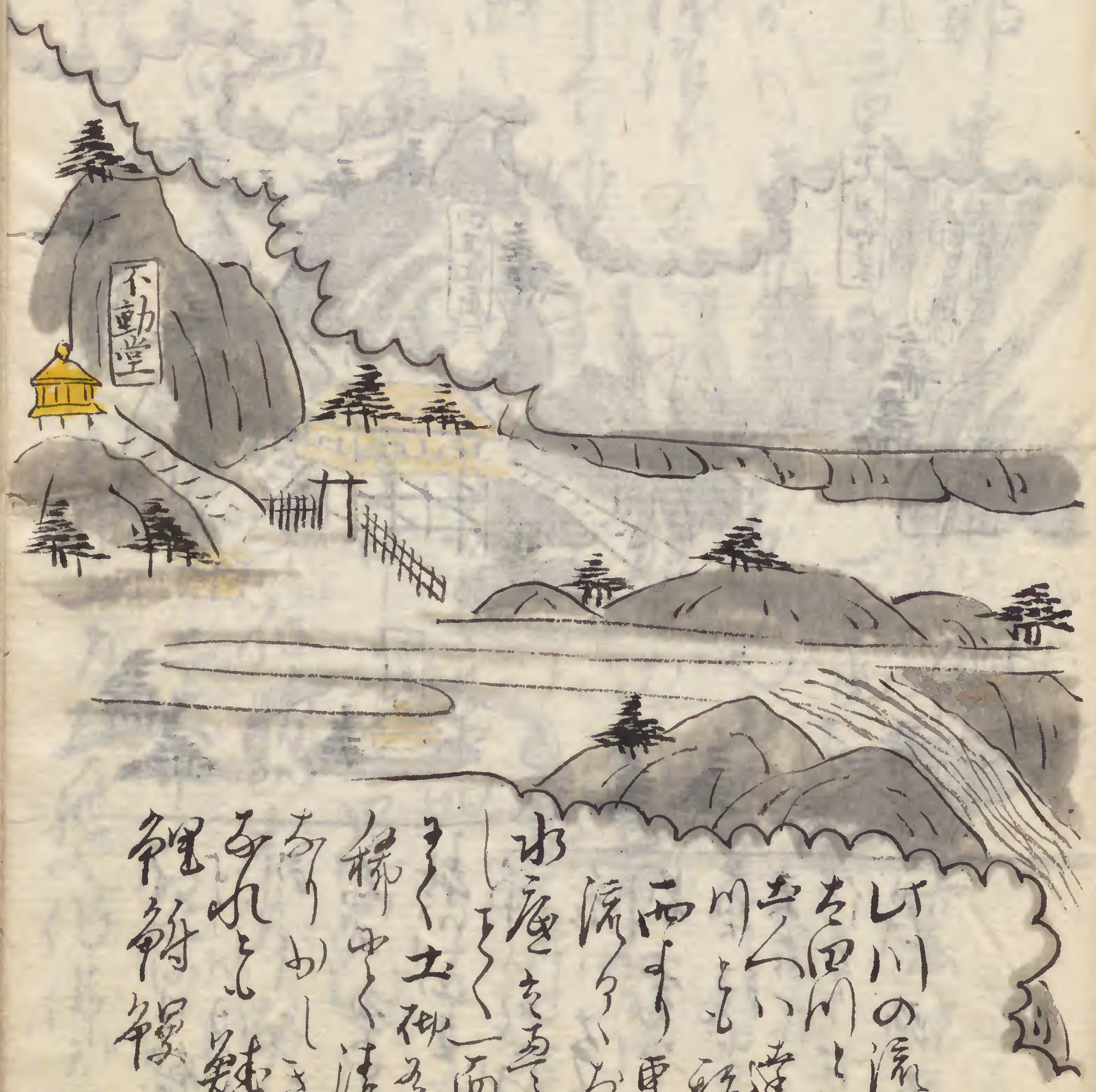
有りて文字の形見えたる文 筆廿二字明
なり其外ハ見へかたし
桃洞より出し所八太阿弥陀堂ニ遊ひ所

ありとかハ一境内に見ゆる地なり
是より西ニ錦戸太郎か居城せしと云
跡地なり
奥羽名勝誌と云 馬取沢を錦ちう地誌
錦戸太郎國衡 原かし山の柵破りてみ
よりて羽州へ落行んとおもひしに高館黒と
称せし名馬ニ乗りけれは比地みぐるし三浦ハ
義盛ニ射る矢内甲ニ当りて比沢ニて死せる
宮重忠郎等の入軍阿佐郎沢ニ出入り
く國衡か首級とり高館黒の

まゝかりく陣中にかゝる是なくして馬取沼と
称せし此沼の地を尋ねて知る人なし近く
見物へ行人に咄ありし
所々に古城跡ある故に其内の古戦場に
天文元亀天正年中の城々ハ知れども頼義
前九年の合戦頼朝卿泰衡征伐の事跡秀
衡時代の事ハ何れも知る者なし奥羽名勝
誌同名所記抔ハ板本に誌せし事跡は
地名々々違しかし和漢三才図会なとに
誌しある同書名所事跡の事ハ埒もなき記

事数多にして大違ひあり嘆しと伝へて誌せし
こともあるべし　信凡歴あらんや

北



此川の流しを
古田川と云ふ
あるいは逆巻
川とも称す
西より東ニ
流るゝなり
水底ニ石を布き
しきて一面の石
にて土砂を不い
故中く清き流と
なりおかしき川
なれハ鮭鱒
鯉鮒鰻
鮠

姫待の飛泉桂石及岩窟ノ圖

桂石と称せられたる大なる岩也
今は傳ふ桂の大樹枯木あり
昔時ハ桂樹繁茂して桂葉
岩をおほひ陰深かり故ニ桂石ト
称したるより 姫待の瀧一丁
たらり 大瀧 五六丈ニ落る高
上の飛泉 落る所下タ二尺
斗 其より急流の川故ニ
瀧なの跡ハ絶て水煙
のたつ所方十間余備口也

北

イワイ川盤北上川
よりの田ゆゆつよ
引しみやなおして
大の釜をこれ一へ
桃川山王窟ゟ
南の明神流て
谷川なり
別当ハ
東稜山西光寺ト云
天台宗三ヶ寺書堂ノ
僧なり 古しハ寺院
四十八ヶ所多し

盤井郡 達谷村 東西廿七八丁村中ニ農家多し
平泉より二里余ト云 一里半ともあり 往来ハ
街道ゟハ一里廿余丁の奥なり 山王窟 中ニ当
西ニ懸造りの堂 中ニて数百丈の巌石ニ所ヒ
さしかけて作り建し也 幾の如く 凡二十一二丈
余 東西八間 南北四間ほとし 東西よりさしかけ
とりかけて 堂ヲ登る 堂中まてハ 毘沙門像
なり 長五尺 古備とも云ふて 村晴の本尊なり
外ニ八百躰 長廿一二尺より二尺斗の毘沙門あり
別当僧の云 慈覚大師一刀三礼の作佛ナト云ヘリ

何国にても佛家の常として一方に夫れの佛多し
解しかきたるの谷底の穴龍を記しきたれは洞
穴の深さ六七丈東西六七尺と云と傳ふ右
「此所は悪路王赤頭王なとゝ云し濯れ
もの住して近民をなやませし也遠津上総介
鎮守将軍利仁田村丸八郎之当国征伐の時に
濯れ者共を征伐はい卒数珠し洞穴に
云まる大竹丸と称せし鬼磨窟此洞穴を
住せしを弘法大師法力をもって降伏せし
毘沙門と云姫待の滝と称せらるゝ京色

よく滝へもよする所西の方にある所之古への云大竹丸
云ひし鬼此瀧の邊に住みけれは姫をとりし
故に姫待の瀧と称し待まへ何を待しと
古き云傳へなしとや
堂中より毘沙門天と記し大額かけあり
第書名記に能書とも知らぬ多聞天と
記せし額をかけあり堂より西の方数百丈
の岩石に長一丈余の大日如来を彫刻してあり別
當僧の云つ源頼義朝根元なり付給ひし

さも有ることハ義経ノ作とも云伝ふなれとも
むつかしき所ニて大日成佛とも悉陀金剛
割せしものなり
不動堂と云ハ長さ五尺ありて不動尊
の木像あり至て古佛なり一風ある雅佛
なり飾て精膳に見ゆるし又さて宝物ハ前々
の宝物の中よ

鬼ノ歯ト云長サ一寸七分色ハ白く
所ありて白き所もありて茶色かかりて
根さも黒し図の如く肉付ありて歯
のさきにハおのつから穴見ゆる大小二ツ
ありし之

蛇ノ奥歯ト云凡角ありて二寸
ありて重き事猶比類なし
蛇ノ牙ト云長三寸余横三寸四分
余天狗ノ爪ト称る物ノ大ひ
なるものゝ色青く肉付ノ
所白し
右の品解しかたきもの

廿二日一の関ニ泊る是ニ一里有壁 二里 金成（カンナリ）岩ヶ崎御道分れ
一ノ関ハ田村右京太夫殿の三万石ニ而至て繁市中
千軒ばかり 大概ゟの町之盤井川町の北流て
土橋かゝる長サ根間八尺の流と成れの風景
有りしより記録ニ有り

一ノ関の景
郡の界ハ一ノ関ゟ
南ニ寄り半丁斗
先ハ鬼死骸村へ
盤井郡南ニて
栗原郡有馬
合村へ
一ノ関領ハ仙台
領の民家より
いよし

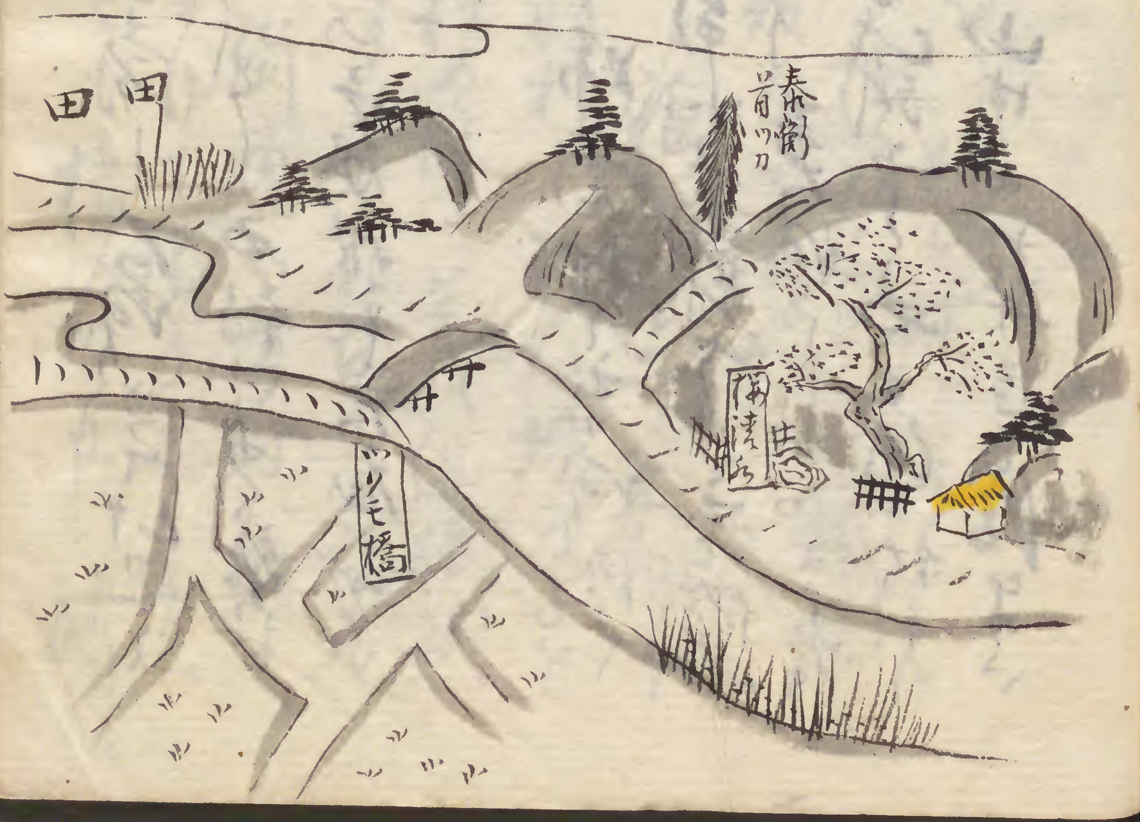
廿三日余成ける翁鳥　西皇　板立一　二皇生　若柳止右
よし近大宰　金成村の内よ観音堂あり　御巡見所之
大同二年田村丸の建立と云し宝物品々の
中よ古物ハ面多し　其諸勝ゑ見あまき
羽衣と称せる衣ありしハ其の精法の紙ある
ともありしハ羽衣と称せるものをよくしたし
ゑまろく　紬を麻よ而絹を織入しこもの
みく粉菌（印）正本の割と見へて古し
今ゆくも割衣しあれバ懸て　古来より伝ふ物へ
往古麻布し　自由あらざりし　世よハ名ある羽

を糸の乃これを繋ぎ合せし身をかくせしより
羽衣と称せり　其の称りしよ佛家より天衣
字を加へて呼も有と　其の説を云ったり
あるし　宝物の中よ古瓦の面の数多けるも
も古し　今は田舎めく古実し称せる社人の
あらい其衣も何ぞハ　猿楽みも知らぬ羅紗を
のこと称し　神前よ幕を張り　書並給
あるおかち退治一天てる神の光ミしかれ
数和いるしの羅紗をしあれ　けふよかけし
面のはる銭幸ひとし　神仏僧仏のならし

宝物とせしよみあり 観音堂の上の方山
権現の社あり 神躰ハ小栗判官姫あり 別當
僧の云ひあり 解しかたし 追て考ふべし

今宿の町より廿余町
南の方飯村と云所にいたる此
橋を称して土橋田地あり
下ハ梅ともいへの古道あり
橋の傍に梅清水と云
名水あり

頼朝公
こちの此頃ハ源方にあるとも
なし
梶原
渡して叶ハ景季かしら首
あかれの首共云へ



若衛の其塚ハ無名の古しるし有りされと此辺に
到りてハ田畑ひろくとして五穀よく熟し
諸品豊しかれハ百姓の家居も大庭あり
世に知る姉崎の里を姉崎村と云ハ有りけく
も橋より凡一里半 南ハに當對せり云伝ふ
用明天皇の御時そより 東ありしの女に姉
姉人ありて都へ召る所かしてやまひに伏し
死て里人ありてそれとて 山中に葬ることを落ます

妹をとめける所に来り姉の墳に行めく
古しるしの松を植たる人其所姉墳（アネガツカ）
松と称候古来ハ幾百年も枯すしてつきし
其後一株ありける跡ある松二タ本ありけり
今村の名は書ハ姉羽村と誤れる 墳の字を
崎しもの有かなし松の傍に義經腰掛
在りける地理を見るに此所古への古名
なりしハ今往来なる街道ハ昔時ハ沼にて
もありしこゝ沼地よけて掃手よるそ方へ
往来せしと思はれたり 橋のかゝりし所

まつ山道筋とも、むかしの古道ありて絶し
よみ人知らず
古歌に
栗原や姉歯の松の
人ならは都のつとに
いさといはましを

かくたえゆく年つもり明行末より姉羽の松の雲のそよ吹く世かし
以隆
用明天皇御製哀
古の人は栗原や姉歯の松の哥の如く
此二首ハ業平の昔物語之共ニ何を記ス
解しかたき事也之
古松軒
みちのく姉歯の松は誠の世にかくれなしとて世をやゆかしん

婦羽村の周よ鷹の羽の清水とて称する所
自然石にして鷹の羽を似る不思の羽を
見るいかにし

廿四日茨柳川茨城篤 罕 た沼 常陸 柳津上石
茨柳は五町ばく三百五六十軒ある所よ沼あり
柳ハ廿間ばかり長サ三十丁余 鯉鮒なとある事の
多き沼之元来茨柳の東を流る 鬼怒井
川の古川ゆゑ柳ハ今よ埋らさる故の沼之有し辺
よ来りては田畑ある所に開き 鉄方石も何ぞん
思ふの千代之九州肥後の事と思ひ合するよ
此辺ハ肥後の何中よりも移り 風土之婦人
の化粧もし 様かんさしなとさせし事と見え

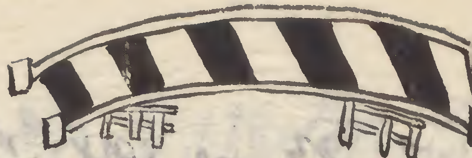
かくる中ずして羽州秋田奥州津軽南部の
境中より雲泥の違ひあり其ゆへは六丁
を一里とし一町は六十間と云事
委しく紛る者も人足の内には稀なり
其辺郡をおすへし
西は雫石郡 石神村 東は豊岡郡石鳥谷村
此辺の巡見道は曲道多くして流は雫石
郡へかかり七ッまでのり行く豊岡郡
加賀野村と云に入れ右沼より東三里平地と
云に 仙臺屋の伊達 式部 知行二万石の城

新町にて町も大坂の町ほどにて本津町も七
八人豊岡郡豊岡の城に稀ーて住居より
入る新 杉林の間を橋を入て風景あり
町の東は 北上川流し 要害もよき地之
定て古城跡をもつくりひし 館は城なし
北上川を渡り ゆし行は西は豊岡郡
日根平村東は本吉郡薫年村 柳津より一里半
廿五日 柳津より いち出る 三里半 過壺村
三里半 壱一町之 石の巻七百石郡 界 西は本吉郡 柳津より

東ハ桃生郡樫崎村

辻堂よりハ北上川の堤を通りて石の巻へ
三里半 南へとわかるゝ北上川弐辺ヶ股と
なり一流ハ石の巻に落一流ハ十三浜十五
頃なりとぞ云ナに落て海に入る中之辻堂村
と石の巻との間に飯野川北ハ桃生村
山根村南ハ牡鹿郡南根村之辻堂村よりハ
西ハ大川又ひらけ田野もよろしく上國に
見へく人物もよくなりとぞ言なりし華寺
呼しに一旦も大隅りと云ばにても二人ぞ

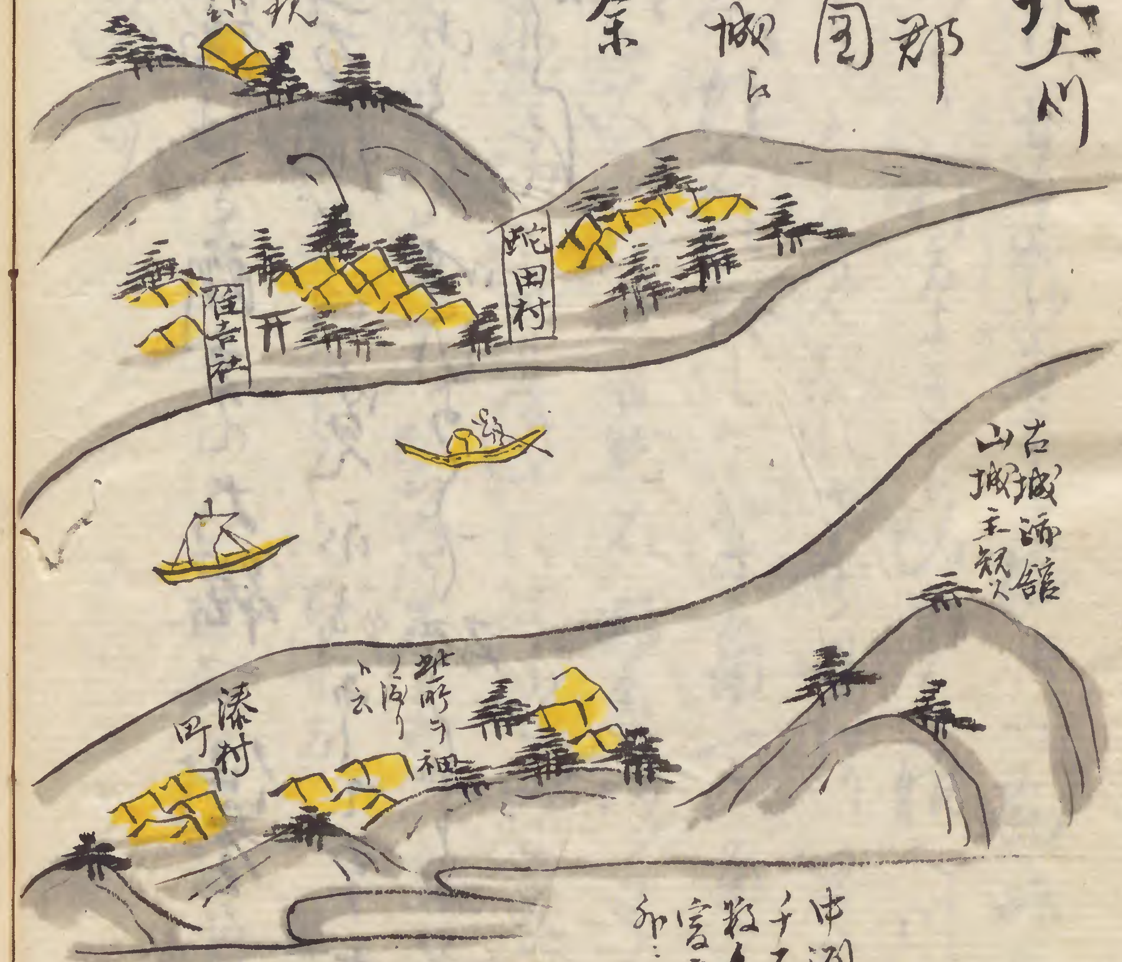
かりのみとハいつもなるなしと云砂に云去く一宿
ハ山嶽のかゝへによりしつもりと思ハれ
待りつへ志ぎ孫も北方に密なりし風雨に
拝花楽ね来く上方御も蒸り遣ハ
まつ噴氣おさく葉を動しし橋のかかい
絶て有ら跡みてハいまハ行跡不調四跡の
ると知りく人稀みして廿部にあり其不調
法に見ゆるなりまし多し
此辺ハ橋に圓の如く高く反あげて架石テ



通行せしむるよふせし　橋台は勢田の橋にならひ
あらし利方よきことも多く雑之川舟の
つかりかもよろしからず舟形ハ其石ハ
土人極石と称して八寸角又ハ九寸角にて
天気を知る自然石ゆゑ朝夕なりて
枕木をつなぎ合せ㊞しよせ出ふ之山と云之
石の色ハ青く黒き石あり其ころ
に含げハあめのふるを告げる
石もあり　かし青色の石之世るハ珍らしき石
もあるものあり

海奥の價値ハさき所みて大鯉一ツ仙臺候家
の御用に二百両づゝハ寛永の頃より年々七八両
土佐鯉のおとく味ひよくして碑ハ尓ニ候ある
たゞ土人ハ知らだ

奥州牡鹿郡
石の巻之図
是より仙台ノ城ニ
十三里十丁
松嶋ニ七里余
右廿六丁道



中洲ノ所モ広サ
千石ソコノ海船
数多ツリルテ之ル
富テ賑ハ敷家ニ
和ニ繁昌ノ湊ヘ

鹿島明神ノ社ヲ
土人ハ鹿島御子ト
称ス金花山ハ此
所ニテ御巡見使
遠見ニテ所ノ役
人出テ金花山
事ヲ奉申上
書付テ呈セリ
石ノ巻ヨリ金花山ハ辰巳
ニアタリテ陸十里少シ余
海上十六里徑道ま計

石の巻ハ奥州第一の津湊にて南部仙臺の
産物此地に湖して江戸えつミ大坂へまハせる
故ニ諸国よりの入船数多く繁昌の湊也
当所の者ともハ市中千四百七軒
寺院十八ヶ寺社十一社と云し町家ハ
湊村門の脇村と云所まて家つゝける
所二千軒余もあるへし 備前も数軒之
人物言語も大家なる所あり 廣気の家
此辺所へ来りて金花山をはるかに遠見する地にして

名ハ日和山と称して見るべき所也 扨風景
はるかにみわたせハ山遠く海上をのぞみ蒼海
満々として大浪白雲の如く波しけり何方遠く
見られとも よしの日ハ晴天の日ハ十六里
金花山を見るなり 又七日まて風もなき日ハ日光
見へ金毛山ともいふ 蓮の如く花に似たるも[illegible]
故に云伝ふる事とも[illegible]
島々おほく有り 南は遠く東方の地
景色を尽し又ハ松嶋 東方の海原に
而して田代崎入海[illegible]

此山上より見渡せハ都てさハりたりのお
遠ク海かぎりなきこゝ之廣大の國なれハ
委しくハしめしと其頃なかぬる事を知らせいし之
廉名此家の傍よりまきの句を石に彫刻て
有り面白からぬ事ならず記し置ぬ
雲折し人を待る所なんくの為
さて此地石巻と称せるハ北上川の
水底に鬼石と云鬼に似たる大石有しと
魃（ガッツ）の年又ハかハし見事る事有りし岩をまハりせし

所ゝく石の巻と云しし　葉山の名もかくしし
なり
北上川ハ先達ても云大いなる遠しひし大河にて
川幅も廣く水深し　千石つみの大船帆
をあげ何事も積入おきて下へも通ふ
まうセの川
新渡辺
袖かけ流り
桐樹
みちのくの北上の流れ川心のふかさにあかれてぞむ

名所のよし野と菅原伏見の里と云ふ地ハ牡丹
郡よし野村と云あり金花山へ参詣の渡海ハ
道之此地へ渡れ

續古今　　　　　　　権大納言成朝

まこもかる八傳をあらしなにしかもよし野菅原露

古歌多し雅しぬ五人の云傳こうらん珊瑚帝
昔八宮王子義良親王の御事源氏所ハ
今此と云ふ地ニ有りし物語せしも此所也
又の其花菊多し中にも梅の子能川
嘉いかと名物とて

さて此所まで来りて金花山へ到らずかへらんは残
の志なきにいくせんと渡秋を案しあらひし
るにあやにくに所用先の事の起りいかにもありかたく
此地の人にとかくするうちもんなのまゝの色ハ
心を残しつゝおもひしこれへ志のまゝに出船の通じ
中所清三郎といへるハ此地の長にて風流
をしりぬるに自なまし金花山のなれし人と
此をしなる嬉しきものに連ひ添んばかりの尊
ぶへくたる悲せるもの有り金花山ハ山の形珠

のあらく浪寄りきわの形ち亀に似たり宝来
山とも称え且鶴形又化西に云所なり金北山
には黄金満し条諸の山道沙金ありと
いふなりきこ露しき鹿説にして山中におほく
ありしより金色の石おほし　椿葉より山の頂に
登り所曲道にて四十八町山周世六里と
云ふ山なりは大はしよりの云ひあらはしにして世六丁
なかにもあらたいまふに見立一里半もやいしに大瀬
を鎮めるのみ之八方の谷に八十八ケ洞穀三石
八十四穴あるは大ハ黄金石を穿し穴と
なんへく山穴に深く入しハ黄金石を拾ひける

るすへ志つ此ほと當山の採掘所ある事をおしみ
のかくして今さら穴に入る事をゆるさゞる由
化西の好る事也所より採掘して黄金石残
そらんとおもへハ別當中寺院より印庇を請く
おしく黄金石残らず取る事も又多やすく
いはかくてその時ひとりの盗賊数人穴に
入りて黄金石を数多取り去る其の黄金と思ひ
て石の光ゑに持来りて売りてその黄金
なりけるは全く石なれは誰か知りて買ふ
へくもあらすありし故に酒の價に与へおきけりし

しと云るく光りつよく現世人をみちびくこれの石なり
山上にハ天親大権現と崇奉して雑戈天城
みちりとも云ひまゝハ飛来権現のあ至るも
云未詳きて此山上より遠見せるに日本
の東畑にして周にちへまる無出もなく海
海んとし天よまし山るのこゝ文東雲蔵へ
ハしせずりかりて懐洋石と称して龍角
のの晶晶ありとるか数ま圓十三もろ嵩山第一の
宝石権現の宝輪と云志ふれとも日かけまて
菩深く生しても麗いさらに水晶とは

思ひへ条治せる人の指さきを砂を流け菩提
ちかふちしむれし本りしこかきし跡のこ水晶の
ちうし光りけり亦ハ常の石を菩提せのこ
あり布思ふに水晶おはしが磨けども光りハ
はなきを数きの指を砂をつけてけり磨し
不かぞりよ立りぬかさし亦ハ平生の石のごし
とは水ハ秘露ある石ありもしハ玉なんら
玉磨きされば光りありしと 玉ハ水晶石英同り
あるハ異ハにて磨きるとらちハ常の石なく同利
のあるものこ

古しへハ寺院も四十八ヶ寺社家もありし繁昌
の山なりしに戦国の時に十七山にいたるの黄金
もありけるに出ひとゝ討とらされの卒云
なく源浦しす寺院ニ入り僧俗を殺
害し乱入せし故に終に滅亡し久津
住む人も無請せる人もなかりしに慶長年
中に至りや無頼岩金の僧盛義坊と七僧と
云ひし徳名高き名誉の施しなげ
きし十七ヶ山に源りし再興ありしより今
の如くに諸所より無請の人をも有けるよし

別當大金寺七僧の開基なりと云
聖武帝天平二十一年當山より黄金を献じ
捧しるに世人のよく知る所なる 又土人云ニ傳ふ
金花山東凡卅余町沖なる所に有り
羽州奥州ニテハ海底ニ岩石ノアルヲ一ハリト云 其中に
上方中国ニテハ一ハリトハヒトト云 又一ツコトモ云所モアリ
黄金石の形の形に似たりて其年に船
年々の間にいろいろの石も海のなかにありける
行りけるに金花山より見れば形の後とも
称ひつきにて 海上にありけるなりと云

下枝に黄金の溢出しとみあらんかぎり極て
地海上みて正ル海嵐ハ皆ヲ金色にかけて
代々の海嵐といふ大ひに異へとの物語あり
当山には素石も金ありといふ けつよし 権現の神
まてもわしこのふきて下向の時は草履をぬぎじ
まそしぬきて来てさきたまひて立る事と
云なくもその砂をば少しも海せざる事なれ
も独色へ下山なるの様にしてぬかしは権
現はりよふその御なりを持つてまゐるまあり

萬葉集十八　加陸奥國出金

詔書歌一首
并短歌三首 天平感寶元年五月
十二日於越中國守舘大伴家持作
之 長哥ハ略し短哥ここそたらし

大夫の心をもほゆ 大君のみことのさきを聞けば
たふとみ 大伴の遠つかむおやのおくつきは
しるくしめたて人のしるへく すめろきの御代さかえ
むとあつまなるみちのく山にこかね花さくる
右の歌よりてみちのくに詠せるのこなり

伊達家五代目陸奥守吉村ハ殊に和哥の道に
好きのはいれ家の綱村に先だちて百首の集
家をと富山寺に奉納志けるにも自ら写したる是
行面白事ニ思ふべし事なかりし旅中ハ
日々ね写しける事も有りし由ニ而略せしこ
一首を載せるのミ

みちのくの国の萩を今も咲かゝる山の花をみちのく 此山

吉村公と称せしを和哥のことなど賢君なりしと

享保の物語之ニ至りての事なりしや役人より
勝手の窮困者の者へ用金をかけし事
なり吉村公是を聞召し役人を召して
百姓の下々の者を大き
に役せ給ひしハよりハ下々の者をなく
くるしめつゞきにしより上みめしと云事ハ道
なり百姓ハ用金なども申付る事ハ為ならし
きる事なく遊しきこと下々のみならじとも恥辱なる事之
其役人ハ此家をとり上られしと云
家中ハ絶し其の子孫ハ甲斐やらへ出でまぬ取がめく事
ハ

殺人せしむるに感して便金の功徳ありしとなり
今こゝもむかしにかはりて百姓の住所の畠となりしと云
しあり
廿七日石の巻を発足す 北村箱泉寺と禅家
寺と言寺より迎日へ渡り三所ともに体さて正宗家
寺は慈覚大師の開基には古跡不之宝物
厳しく残りしも鉄し宝珠の物語野多之
国家より寄進有し思縁を便偽補よりきよる
云をおかしく見捨りて一山笑せし得たる庭

云廿一丈余の霊木此寺にあり是枝も多く霊木と号し
て慈覚大師此霊木の本へ袈裟を掛けられし
よりてかくの如くなりに志多かりしといふなり
柳の如く枝多く霊木の本之北の方に
寺は国家の為に手植の跡にて石碑あり
北村の間に広渕村と云所に三方卅余丁の
沼ありて広渕沼と称し奥羽にては湖といふ
称せられて湖ともいふ沼とも云なり
郡界 桃生郡 北村
志田郡 谷地村

谷地と云ふ大村にして枝郷多し此所にも大沼
あり名館（たて）の沼と称して方卅七八丁余也
も絶る地之産鮒あり一尺七八寸二尺ばかり
の鮒を取りて鮓にせしと也大鮒は稀にて
見る事あるとかや　廿日北村より二里余涌
谷村止宿
廿七日涌谷より發足　古川村
川より出る玉造川と云ふ出羽の高城より出る
小野小町

立入る玉造江に漕舟の音すなりて詠君哉
小野なれて
和歌には江とよみしや當國の名所なりと
いへし川なり仙臺騒動記にも書たりし忠臣
伊達安藝の在所涌谷の館と云ひしは玉
造川の要にあり從来より見ゆる之此所にし
涌谷沼とて大沼あり馬上よりいて見てしるへ
古川村は宿とある此所を町のはずれ小キ土橋ありて
三四日軒の町にて　名所の緒絶の橋と云へる所なん

実論に思ひ出す古へまた古遠川此所へ流し
事ありて橋の行しや今ある橋を流し流せし
橋とハあらん

後拾遺
みちのくの緒絶の橋やこれならんふみゝふまずみ心まどはす　左京大夫道雅

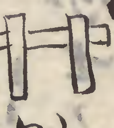
続後撰
白玉の緒絶の橋の名もつらしくだけて落る袖のなみだに　定家

東路ハ都遠の橋もとゞろのかりにもくちゆく袖にかゝる　順徳院御製

此辺古跡多し

志田郡　鶴埣村
志田郡　下埣村　古川村ハ志田郡へ　志田郡　新堀村
黒美郡　稲葉村　道
大ひろ入組　北賀美郡　南黒川郡　大衡村　北黒川郡大谷郷ハ黒川郡へ分郡今世大谷郷ハ分郡せり
混じて有り

七八日中新田の宿泊　四里　吉岡　三里　松嶋　塩竈
吉岡ハ古所なく仙台侯の家老但木土佐在所にて
仙台侯の家老の所領士千石をも給ふ主なし
其宅也ならびなく多ちへ人其所の居住
なし此所仕来の

かゝる者ニて士族の人ハ門を建つ武家とハいゆる
よつて建てありし所の門ハ建築なきよしも
あれハ其家を  かくの如きの冠木門を建て
武家の表としたるものなり恐しく士分の格式
然るに今の世にハ氏も苗字百姓にても身上よ
ろしき者ハ金銀を費し上納せる者ありハ大の冠木戸
門を構へたる事なく金銀を費し歴然と
なりしより此ことの事ハ何とも思はざる
事にて中国筋の百姓金銀多き帯刀せる
も同し 然も百姓も金銀を以て格式を売

賀せる風俗百年以来の事なるべし 金銀を
費すものもなく 恥しき事もなかりしなるべし
生ずるの人
豊後より北七八丁ニ至る城と云ふ地の地所
難きのありて地つし此人のものより
松島より松の名所 十一風
京にいふ儀なるありさまにて膝を
濁しなるを費し其見とて可かく
これらの事之是より十の巻に記す

東游雑記巻之九終

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan